

【翻訳】            ギュンター・クロネンビッター  
「オーストリア＝ハンガリーと第一次世界大戦」\*

島田昌幸 訳

解        説

来年 2014 年は第一次世界大戦の開戦 100 周年にあたる。欧米ではこの年に合わせて第一次世界大戦に関するあらゆる分野の研究が進められているが、日本では京都大学文学部人文科学研究所の研究プロジェクト「第一次世界大戦の総合的研究<sup>i</sup>」だけが気を吐いている状態で、一般的に「開戦 100 周年」に対する関心は薄い。近年、日本の国際政治学、歴史学研究において第一次世界大戦関連の研究は決して多くはなく、国内の学会等で話を聴いていると、1960-70 年代のいわゆる「フィッシャー論争<sup>ii</sup>」で研究は事実上停止しているとの印象を受けなくもない。これは国際政治学の一分野としての国際政治史では主に関心が第二次世界大戦後に移ってしまったことと、歴史学では社会史の抬頭により、政治史・外交史という研究手法そのものが廃れてしまったことによるのだろう。だが最近では国際政治学・歴史学双方の若手研究者の中から、「旧外交」時代を扱う研究が出てきているのも事実であり、今後の研究の発展が期待される<sup>iii</sup>。

本稿は Günther Kronenbitter, “Austria-Hungary and World War I,” Günter Bischof and Anton Pelinka (eds.), *Contemporary Austrian Studies*, vol. 5: *Austrian National Identity and Historical Memory* (New Brunswick: Transaction Publishers, 1997), pp. 342-356 の邦訳である。内容は 1980 年代から 1990 年代半ばまでの第一次世界大戦期のオーストリア＝ハンガリーの主に外交史および軍事史の研究動向紹介である。これは 1997 年に出版されたもので決して新しいものではないのだが、ここで敢えて翻訳を試みるのは、現在日本では第一次世界大戦周辺の外交史・軍事史研究について、1980 年代以降の欧米の新しい研究が殆ど紹介されていないからである。しかもオーストリア＝ハンガリーを扱ったものということになると、一部の例外を除きその数は皆無に等しい<sup>iv</sup>。

さて著者のクロネンビッターは 1992 年、オーストリア帝国宰相クレメンス・フォン・メッテルニヒ（Klemens Wenzel Fürst von Metternich）のアドヴァイザーとして知られるフリードリヒ・フォン・ゲンツ（Friedrich von Gentz）の政治思想を分析した博士論文をアウグスブルク大学に提出した。さらに 1997 年から 2004 年にかけてゲンツの著作集を出版している<sup>v</sup>。ゲンツ研究からスタートしていることから窺えるように、彼は歴史叙述に

\* 今回、翻訳と『学習院高等科紀要』への掲載を快諾して下さった G. クローネンビッター教授（アウグスブルク大学）と掲載誌編者の G. ビショフ教授（ニューオリンズ大学）に深甚な謝意を表したい。

において外交や軍事面を重視する伝統的な方法論を採用している<sup>vi</sup>。2003年には教授資格論文(Habilitationsschrift)をもとにした『「平時の戦争」オーストリア＝ハンガリー陸軍指導部とオーストリア＝ハンガリーの外交政策 1906–1914』(“Krieg im Frieden”. *Die Führung der k.u.k. Armee und die Großmachtpolitik Österreich-Ungarns 1906–1914* (Munich: Oldenbourg, 2003))を上梓した。本書はハプスブルク陸軍指導部がオーストリア＝ハンガリーの大国地位の維持のために戦争こそが有効な手段であると考えていたことを示し、1906年以降の「平時」における軍指導部による様々な戦争計画立案過程が分析されている。

何ぶんにも稚拙な訳であるがゆえ、クローネンビッターの意図が行方不明になってしまったのではないかと危惧しているが、第一次世界大戦開戦100周年を迎えるにあたり、日本でもここに紹介されている研究に少しでも関心が集まってくれば、と思っている。

なお文中の(※)は島田による加筆である。クローネンビッターが付した註はアラビア数字でページ下部に表示し、島田による訳注はローマ数字で文末に付した。また訳出にあたり、同僚のフォレスター先生(Mr. Hamish Forrester)と高校時代の恩師の勝野栄一先生に助けていただいた。ここに記して謝意を表したい。だが翻訳に伴う一切の誤りは訳者の責めに帰する。

## 本 文

(※オーストリアの著名な作家)フーゴー・フォン・ホフマンスタール(Hugo von Hofmannsthal)の友人で、1914年にはワルシャワ駐在公使を務めていたレオポルト・フォン・アンドリアン＝ヴェアブルク男爵(Leopold Freiherr von Andrian-Werburg)は、1918–19年の冬に書かれた第一次世界大戦開戦についての回想の中でこう断言している。「我々、オーストリア人が戦争を始めたのだ。ドイツ人でもなければ、ましてや三国協商でもない。このことを私はよく理解している<sup>i</sup>」と。「第三次バルカン戦争<sup>vii</sup>」の引き金を引き、結果的に第一次世界大戦の勃発をもたらしたのはオーストリア＝ハンガリーに他ならないという事実があるにもかかわらず、第一次世界大戦の起源を研究する者たちは、当時の国際関係の力学や「七月危機<sup>viii</sup>」以前とその間のドイツの役割に焦点を合わせがちであった。今日においてもドイツ内外の研究者たちの間ではハプスブルク帝国を強大なドイツ帝国のひ弱な付属物と位置付けるのが一般的な見識とされているようだ。(※米ソ)超大国の冷戦体験がこうした(※オーストリアをドイツの付属物として扱う)視座を好んだというのは、十分あり得る話である。しかしそれよりも遥かに重要なのが、第一次世界大戦前および戦中のドイツ史全方面についての無数の研究を触発したフリッツ・フィッシャー(Fritz

<sup>i</sup> John Leslie, “Österreich-Ungarn vor dem Kriegeausbruch: Der Ballhausplatz in Wien im Juli 1914 aus der Sicht eines österreichisch-ungarischen Diplomaten,” Ralph Merlville et al. (eds.), *Deutschland und Europa in der Neuzeit: Festschrift für Karl Otmar Freiherr von Aretin zum 65. Geburtstag* (Stuttgart: Franz Steiner Verlag, 1988), p. 675.

Fischer) のテーゼに関する論争 (※いわゆる「フィッシャー論争」) である。1976 年, (※オーストリアの歴史家) フリッツ・フェルナー (Fritz Fellner) はいわゆる「ホヨシユ使節団 (The Hoyos Mission)<sup>ix</sup>」に関する比類なき分析を世に送り出したが, この論文は「七月危機」におけるオーストリア＝ハンガリーの役割についての研究を世に促すことを意図していた<sup>2</sup>。それから約 20 年の時を経て, 数多くの研究がハプスブルク帝国最後の 10 年間の国内政策と外交政策に新たな光をあててきた。残念ながら, これらの学術的労作は中・東欧の学界と世界各地の少数の専門家たち以外には広範な読者を獲得するに至っていない。ましてや一般世論や国際的な学術研究コミュニティはその存在すら知らない<sup>3</sup>。だが希望はある。現在, 研究者と需要側のギャップを埋める書籍や学術論文が出ており, そのうち少なからぬものが英語で出版されているからである<sup>4</sup>。

フェルナーと他の中欧の研究者と共に, 英国や北米の歴史家たち, 例えばフランシス・ロイ・ブリッジ (Francis Roy Bridge), イシュトヴァン・デアーク (István Deák), ノーマン・ストーン (Norman Stone), ソロモン・ワンク (Solomon Wank) そしてサミュエル・ウィリアムソン Jr. (Samuel Williamson, Jr.) らは, 近年ハプスブルク帝国末期研究として栄えるこの分野の隆盛に至る道筋をつけた人たちである。特に周到かつ包括的な学識の代表例としては, ジョン・レスリー (John Leslie) の 2 つの論文を挙げねばならない。その研究は 1993 年 (※実際には 1994 年 1 月) の彼の死により, 悲劇的に終結することになった。フェルナーの言によれば, レスリーの

オーストリア＝ハンガリーの戦争目的に関する研究と第一次世界大戦におけるポーランド問題の歴史についての壮大な構想は完成しなかった。だが彼が残したいくつかの論文, そして個人的な討論, また公開の場での歴史についての無数のディスカッションにおける彼の問題提起によって, レスリーは第一次大戦期のハプスブルク帝国の歴史についての我々の理解に極めて重大な貢献をしたのであった<sup>5</sup>。

<sup>2</sup> Fritz Fellner, “Die Mission Hoyos,” V. Čubrilović (ed.), *Recueil des travaux aus assies scientifiques Internationales: Les grandes puissances et la Serbie à la veille de la première guerre mondiale* (Belgrade, 1976), pp. 387–419. (※なおこの論文は Fritz Fellner, Heidrun Maschl, Brigitte Mazohl-Wallnig (eds.), *Vom Dreibund zum Völkerbund: Studien zur Geschichte der internationalen Beziehungen 1882–1919* (Vienna: Verlag für Geschichte und Politik, 1994) に再録されている。)

<sup>3</sup> Fritz Fellner, “Austria-Hungary,” F. H. Hinsley and Keith Wilson (eds.), *Decisions for War, 1914* (London: UCL Press, 1995), pp. 9–25.

<sup>4</sup> 最新の調査に基づく 1908–1918 年のオーストリア＝ハンガリーについての総合的な研究については Mark Cornwall (ed.), *The Last Years of Austria-Hungary: Essays in Political and Military History 1908–1918* (Exeter: Exeter University Press, 1990) を参照のこと (※なお本書は 2002 年に増補版が出版されている。Marc Cornwall (ed.), *The Last Years of Austria-Hungary: A Multi-national Experiment in Early Twentieth-century Europe* (Exeter: Exeter University Press, 2002))。

<sup>5</sup> Fellner, “Austria-Hungary,” pp. 10–11.

レスリーが冒頭に引用したアンドリアンの覚書を公刊したのは1980年代のことである。そしてその死の直前に、論文「オーストリア＝ハンガリーの戦争目的の来歴：1914年前後におけるウィーン（※オーストリア）とブダペスト（※ハンガリー）の政策と政策決定者たち<sup>6</sup>」が公刊された。副題はこの研究の守備範囲を示しており、関連する1次史料と2次史料についての著者の比類なき知識というものを証明している。1914年の重要な政策決定者たち—コンラート・フォン・ヘッツェンドルフ参謀総長（Franz Conrad von Hötzendorf）はその職業柄好戦的な人物であった；ハンガリー首相のイシュトヴァーン・ティサ（Istvan Tisza）は「七月危機」においてオーストリア＝ハンガリーが武力に訴えることを2週間阻止する拒否権を出した人物であった；そしてティサのもっとも重要な外交顧問のシュテファン・ブリアン（Stephan Burián）；研究者でバルカン専門家であるルートヴィヒ（ラヨシュ）・タローシ（Ludwig Thallóczy）；オーストリア首相カール・シュテュルク（Karl Stürgkh）；共通蔵相レオン・ビリンスキ（Leon Bilinski）；そして（※共通外相）レオポルト・ベルヒトルト（Leopold Berchtold）と彼の部下たち—について、戦争と和平についての各人の見解が検討されている。（※そして）バルカン諸国、南スラヴ問題、（※オーストリア＝ハンガリーの）国内政治と外交政策の関係性、オーストリア＝ハンガリーの衰退しつつある大国地位といったテーマが極めて綿密に分析されている。レスリーは（※政策決定者間の）大きく異なる見解が1914年7月にどのように一致に至ったかを示したのである。フェルナーとワנקの研究も加わり、レスリー論文はオーストリア＝ハンガリーの指導者たちが、ロシアによる介入（これは十分あり得る話で、実際に世間では予測されていた）を考慮せずに対セルビア戦争を選択したことを示している。特にオーストリア＝ハンガリー外務省（Ballhausplatz）のスタッフたちの中でも、ベルヒトルトの前任者エーレンタール（Alois Lexa von Aehrenthal）の礼賛者たちは積極的外交政策と拡張主義的外交政策だけがオーストリア＝ハンガリーの多年にわたる政治的危機を乗り越えるための唯一の方策だと見なしていた。

レスリーとワנק<sup>7</sup>がハプスブルク帝国の外交政策の国内的背景（※民族問題等）と国内の政治的な調整（あるいはその欠落）に力点を置く一方、ウィリアムソン<sup>8</sup>と特にブリッジは国際政治的な文脈により関心があり、特にブリッジは1908年～1914年のオーストリア＝ハンガリーの外交政策について簡潔な解釈を提示している<sup>9</sup>。ウィリアムソンの『オーストリア＝ハンガリーと第一次世界大戦の起源』は、マクミラン社（Macmillan）の「20

<sup>6</sup> John Leslie, “The Antecedents of Austria-Hungary’s War Aims: Policies and Policy-Makers in Vienna and Budapest before and during 1914,” Elisabeth Springer and Leopold Kammerhofer (eds.), *Archiv und Forschung: Das Haus-, Hof- und Staatsarchiv in seiner Bedeutung für die Geschichte Österreichs* (Vienna: Verlag für Geschichte und Politik/Munich: Oldenbourg Verlag, 1993), pp. 307–394.

<sup>7</sup> Solomon Wank, “Desperate Counsel in Vienna in July 1914: Berchtold Molden’s Unpublished Memorandum,” *Central European History*, No. 26 (1993), pp. 281–310.

<sup>8</sup> Samuel Williamson, Jr., *Austria-Hungary and the Origins of the First World War* (Houndmills: Macmillan, 1991).

世紀の形成 (The Making of the Twentieth Century)」シリーズのために書かれたもので、大戦前の数年間に焦点があてられている。この本を傑出した研究業績としているのは、対外関係だけでなく二重帝国の国内構造の途方もない複雑さについての情報を見事に選別・配置した点である。既にある程度知識のある読者を退屈させることなく、またハプスブルク帝国 (Kakania) の風変わりな点に馴染みのない読者にとっても、彼の議論が分かりやすくなるよう必要最低限の背景事情を提示するという難しい課題を、ウィリアムソンはうまく処理している。ハプスブルク帝国の国内情勢とその外交政策の手段についての章、そして帝国の味方と敵についての章は簡潔かつ明解なもので、オーストリア＝ハンガリーの支配エリート層が直面せざるを得なかった困難な問題を明らかにしてくれる。ウィリアムソンによれば、「1914年の戦争到来のストーリーは、ある意味でどのようにハプスブルク政府が南スラヴ人問題は戦争でしか解決できない、と確信するようになったかという物語でもあるのだ<sup>10</sup>。」

この過程を説明するため、ウィリアムソンは1911年以降の国際関係におけるオーストリア＝ハンガリーの立場の悪化にハプスブルク帝国のエリートたちがどう反応したかを描いている。彼は読者に、ハプスブルク帝国とセルビア、モンテネグロとの対立について、当初は平和的な解決を主張していたベルヒルト外相が「どのように」そして「なぜ」ウィリアムソンがいうところの「武人外交 (militant diplomacy)」にどんどん傾倒していったかを理解させる。「武人外交」とは、(※武力以外の) 別の形で強要できない場合の外交政策手段として、戦争には至らぬ形で軍事行動を用いることである。1912年～1913年の3度の危機 (※第一次・第二次バルカン戦争およびアルバニア危機) を経験して、ベルヒルトや他の文民指導者たちは— (※とはいっても) ハプスブルク帝国の中の文民指導者の何人かは含まれていないのだが— これまで以上に「戦争と軍事力を国際システムの必須の要素<sup>11</sup>」と見たがるようになっていった。さらに悪いことに、

アルバニア問題のあらゆる側面をテストケースとして、ベルヒルトはセルビア、モンテネグロそして何より自国オーストリア＝ハンガリーに、オーストリアのための成功が必要となるような状況を突きつけようとしたのである。つまり問題を妥協不可能な国家の威信の問題に変換することにより、仮に相手が尻込みしたとしても、ベルヒルト外相は必然的にエスカレートせざるを得なかったのであった<sup>12</sup>。

<sup>9</sup> Francis Roy Bridge, *The Habsburg Monarchy among the Great Powers, 1815–1918* (New York: Berg, 1990), pp. 288–344. また Francis Roy Bridge, “The Foreign Policy of the Monarchy, 1908–1918,” Mark Cornwall (ed.), *The Last Years of Austria-Hungary*, pp. 7–30 (※増補版 (2002), p. 13–45) も参照せよ。

<sup>10</sup> Williamson, *Austria-Hungary and Origins of the First World War*, p. 15.

<sup>11</sup> *Ibid.*, p. 155.

<sup>12</sup> *Ibid.*, p. 155.



第1・2次バルカン戦争におけるオーストリア＝ハンガリーの「武人外交」と威信政策の出現、そして1912～13年の経験が1914年のハプスブルク帝国の外交政策を形成したということがウィリアムソンの分析の核心である。それゆえに、オーストリアの1914年7月の開戦決定は、仮にベルヒルト外相と他の政策決定者たちが誤った結論に飛びついたのだとしても、それはいわば（※彼らの）学習過程の結果とみなされることになる。この本がオーストリア＝ハンガリーが「七月危機」に至る過程についての、より包括的で読みやすい著作に追い抜かされるまでには、相当の時間がかかるだろう。「七月危機」とは「政治術、権力と危機管理に長けた政治指導者たちが、地域紛争を戦うために意図的に総力戦を戦う危険を冒した<sup>13)</sup>」時なのである。

過去20年間の研究のおかげで、オーストリア＝ハンガリーを戦争に向かわせた国内・国外要因については非常に明確になったと考えられる。だがまだ論争の余地は残されている。例えば表面的にはよく知られている問題、つまり1914年における独逸同盟の意味についてである。例えばブリッジは元からオーストリアとドイツ間に埋め込まれていた緊張関係こそが、「七月危機」初頭の独逸同盟政策の推進力と見なしている。

皮肉なことに、ベルヒルトの強硬策採用の一つの根拠は、ここで強硬策をとらないとドイツはオーストリアに絶望し、オーストリアを見捨てるかもしれないというものであった。「七月危機」の最終段階において、独逸同盟の団結は「ドイツの忠誠 (deutsche Treue)」よりも相互不信の産物であった<sup>14)</sup>。

つまり独逸両国が「今回だけ同意した」要点は「退却はあり得ないこと、そしてこの限定的なバルカン危機は、欧州大戦勃発の可能性があるとなかろうと、独逸同盟に有利な形で解決されねばならないこと、であった<sup>15)</sup>。」

フェルナーは1914年のドイツの政策について全く違う見解を示している。フェルナーからすると、ドイツは反則を犯したのである。つまりドイツはオーストリア＝ハンガリーの対セルビア限定戦争という目標を支持すると見せかけておきながら、実は同時に全く違うことを計画していたのである。

ウィーンの政治家たちは一彼らには理解しがたい手間どりと一貫性の欠落があった—セルビアを征服するための「第3次バルカン戦争」実施のために準備していたが、ベルリンの政治家たちは世界大戦を考えていただけでなく、当初から熟慮され、しっか

<sup>13)</sup> *Ibid.*, p. 215. 「七月危機」でオーストリア＝ハンガリーの対応が何故遅々として進まなかったかについては Samuel R. Williamson, Jr., “Confrontation with Serbia: The Consequences of Vienna’s Failure to Achieve Surprise in July 1914,” *Mitteilungen des Österreichischen Staatsarchivs*, No. 44 (1993), pp. 168–177 を参照せよ。

<sup>14)</sup> Bridge, *Habsburg Monarchy*, P. 339.

<sup>15)</sup> *Ibid.*, p. 340.

り準備された構想を実行に移していたのである<sup>16</sup>。

フェルナーによれば、7月のシュリーフェン・プラン<sup>x</sup>実施のための政治・軍事的な準備、そして特に7月終わりのドイツ政府のオーストリアに対する対ロシア動員圧力は、ドイツ政府がその同盟国オーストリアを意図的に誤った方向に導いたことを示している。フェルナーが7月31日付ヴィルヘルム2世のフランツ・ヨーゼフ皇帝宛電報について以下のようにコメントしているのは何ら不思議ではない。なおこの電報はオーストリア＝ハンガリーにセルビア方面作戦を放棄し、できる限りの大軍をロシア方面に動員するよう依頼する内容であった。

私は第一次世界大戦勃発に関する論争において、この文書にほとんど重要性が置かれていないことが理解できない。このぞっとするような言葉遣い、同盟相手の利害を全く無視する姿勢、そして完全に誤った情勢認識…この電報以上に同盟国の利害に対する裏切りが酷く描かれているものはない<sup>17</sup>。

確かに7月末にドイツ政府からオーストリア政府に打電されたメッセージとそれへの返答は、1914年夏における独逸関係の最初の大きな危機を表している。しかしながらこの独逸同盟（※両国間）の緊張関係については基本的に2通りの説明が可能である。第1にドイツの政治家・軍人の密かな陰謀がオーストリア＝ハンガリーのセルビア侵略を大国間戦争（Great Power war）の口実として利用しようと努めたというものである。この動きは7月の前半にさかのぼるもので、7月の最後の数日に由来するものではない。そしてこれはドイツの戦略上の必要性を（※オーストリアに）強制するという形で最高潮に達したのである。第2の説明の仕方は独逸両国の多様な政治目的と相互不信が両国の軍事計画を両立不可能なものにしたというものである。仮に陰謀説というものが成り立つとしても、それはドイツ政府の政策決定過程の詳細な検討があって初めて（※学術的に）取り扱いうるものとなるが、実際には難しいだろう。ドイツによるオーストリアの国益への背信行為、つまり「ドイツの忠誠（deutsche Treue）」ではなく「ドイツの策略（deutsche Tücke）」を強調することは、超大国の視点から独逸同盟関係を描写する従来の見方の修正版に回帰することになってしまう。つまりオーストリアはセルビアに戦争を仕掛けたいと素朴に考えながらも、にもかかわらず（※ドイツの陰謀で）全面戦争の危険を冒してしまうというような描き方である。だが陰謀説に比べてスリルには欠けるものの、（※独逸の）非対称的な同盟関係におけるジュニア・パートナー（※オーストリア）の決して無視し得ぬ影響力を示すことにより、上記の2つの説明のうち、2つ目の方がウィリアムソンやブリッジの

<sup>16</sup>Fellner, "Austria-Hungary," p. 19.

<sup>17</sup>*Ibid.*, pp. 22–23.

ような国際関係史の研究者からも、そして軍事史家からも好まれる解釈の傾向と合致しているといえよう。

ノーマン・ストーン (Norman Stone)<sup>18</sup> やホルジャー・ハーウィグ (Holger Herwig)<sup>19</sup> が指摘してきたように、1909 年以降の独墺参謀本部スタッフ間の協力関係は、(※両国の) 大きく異なる戦略的必要性と優先順位に基づくものだった。永続的に悪化していく戦略環境にシュリーフェン・プランを対応させるため、ドイツ参謀本部は開戦時にオーストリア＝ハンガリーによるロシア攻撃を要求した。これは作戦の初動において、ロシア軍を足止めにし、ドイツ東部を援護するためであった。オーストリアの積極的なバルカン政策を支援してもらうためには、ドイツの助けが必要であること、そしてそのドイツは(※オーストリアより) 遥かに強い軍事国家であることを考慮に入れると、フランツ・コンラート・フォン・ヘッツェンドルフ (Franz Conrad von Hötzendorf) はドイツの軍事計画をその戦略的計算の土台として受け入れざるを得なかった。確かにドイツ参謀総長ヘルムート・モルトケ (Helmut Moltke) は東プロイセン以南方面の小規模作戦によりロシア軍を混乱させることを約束してはいたのだが。

大国間関係におけるドイツの孤立が深まるにつれて、ドイツ人は恐怖心を掻き立てられることになった。この孤立状態はイギリスとの建艦競争、1911 年の第 2 次モロッコ事件、はたまたロシア陸軍と海軍の整備によりさらに深まっていた。しかもロシアの軍拡はその動員を加速する新戦略鉄道網の建設を伴っていた。戦略的な脆さを補うため、モルトケはオーストリアだけでなく、あまりあてにならない同盟国イタリアとのより緊密な軍事協力を促進した。だがイタリアはハプスブルク帝国内に住むイタリア系少数民族を解放するという失地回復運動(※民族統一主義: Irredentism) を本当の意味で一度も放棄したことはなかった。コンラート参謀総長はかねてから同盟国ながら敵国でもあるイタリアに対する予防戦争を嘆願していたほどであるが、(※ドイツから) イタリアを取りあえずは信頼に足る同盟国と考えるよう説得されていた。そして 1914 年にこれが致命的誤算であることがはっきりすることになる。

ドイツの安全保障政策は三国協商 vs. 三国同盟＋ルーマニアという外交的な、そして最終的には軍事的な対決図式によって形作られていた。ルーマニアはこれまた価値があるのか疑わしい秘密条約により三国同盟と結び付けられていた。イタリアとルーマニアの失地回復運動に直面するオーストリア＝ハンガリーには、また別の検討課題があった。つまりオーストリアおよびハンガリー政府からすれば、1912 年、1913 年のバルカン戦争はセルビアを強化しただけでなく、ハプスブルク帝国を孤立させたのであった。というのも、ルーマニア、ギリシャ、セルビアはロシアの支援を受け、反墺バルカン連盟創設へと歩み始め

<sup>18</sup> Norman Stone, "Moltke-Conrad: Relations between the Austro-Hungarian and German General Staffs, 1909–1914," *The Historical Journal*, No. 9 (1966), pp. 201–220.

<sup>19</sup> Holger Herwig, "Disjoined Allies: Coalition Warfare in Berlin and Vienna, 1914," *Journal of Military History*, No. 54 (1990), pp. 265–280.



ていたからである。1912年と1913年におけるオーストリアの「武人外交」の限定的な成功は何ら具体的な成果をもたらさなかったのである。さらに困ったことに、ドイツは未だにルーマニアとイタリアを信頼し、ギリシャに好意を寄せながら、オーストリアの小アジアにおける遅ればせながらの帝国主義的野心を何ら支援しなかった。今一度、オーストリア＝ハンガリーは次のことを自覚せねばならなかった。つまりF.R.ブリッジもいうように独逸同盟というものは「阻止すべく試みていた戦争が実際に勃発した時だけその価値を顕わにするものだった。平時における外交の手段としては全く使えなかったのである<sup>20</sup>。」

ハプスブルク帝国の軍事作戦計画はいくつかの異なる政治的筋書きを考慮しなければならなかった。つまり対イタリア戦争のみならず、「戦争計画B（バルカン：対セルビアおよび対モンテネグロ）」と「戦争計画R（対ロシア）」、または「戦争計画R+B」を考えねばならなかったのである。しかし「戦争計画R」と「戦争計画R+B」だけが（※独逸）連合軍事作戦の文脈で理解されねばならなかった。戦略的に一番厄介ながら、政治的に一番可能性の高いシナリオは、「戦争計画B」が「戦争計画R+B」へと発展しても、「戦争計画B」に基づき既に部隊が展開し始めているというケースである。動員予定の最初期段階に第2軍（the Second Army: B-Staffel）をバルカン半島からガリツィア（※オーストリア＝ハンガリーのポーランド領土）に移動させることで、コンラートはこうした状況にも対応できると考えていた。オーストリア＝ハンガリーの戦争計画の発展や独逸間の軍事面での合意事項は、ゲアハルト・リッター（Gerhard Ritter）、ストーン、ハーウィグ、ロタール・ヘーベルト（Lothar Höbelt）<sup>21</sup>そしてディーター・デグライフ（Dieter Degreif）<sup>22</sup>らにより分析されてきた。グレイドン A. タンストール（Greydon A. Tunstall）<sup>23</sup>も最近出版した本の中で、1871年から1914年にかけての独逸の戦争計画を扱っている。これは従来のこの分野の研究の中でもっとも包括的なもので、「独逸両国内での軍指導部と外交担当者の相互関係、そして独逸両国間の軍指導部と外交担当者の相互関係<sup>24</sup>」についても論じている。またその終章では「独逸両軍の東部戦線における軍事戦略と戦争準備が十分満足行くものであったのか評価するためにも、第一次世界大戦の戦場の実際についても論じている<sup>25</sup>。」

いうまでもなく、タンストールはこれら全ての側面を等しく説得力ある形で網羅できているわけではない。だが1914年のオーストリア＝ハンガリー軍の動員の失敗、それに続

<sup>20</sup> Bridge, *Habsburg Monarchy*, p. 379.

<sup>21</sup> Lothar Höbelt, "Schließen, Beck, Potiorek und das Ende der gemeinsamen deutsch-österreichisch-ungarischen Aufmarschpläne im Osten," *Militärgeschichtliche Mitteilungen*, No. 36 (1984), pp. 7–30.

<sup>22</sup> Dieter Degreif, "Operative Planungen des k.u.k. Generalstabes für einen Krieg in der Zeit vor 1914 (1880–1914)," (Ph.D. Dissertation, University of Wiesbaden, 1983).

<sup>23</sup> Graydon A. Tunstall, Jr., *Planning for War Against Russia and Serbia: Austro-Hungarian and German Military Strategies, 1871–1914* (New York: Columbia University Press, 1993).

<sup>24</sup> *Ibid.*, p. 3.

<sup>25</sup> *Ibid.*, p. 4.

くガリシアとセルビアでの軍勢の総崩れ（※つまり敗北）、そしてコンラート参謀総長とその信奉者たち、さらに参謀本部鉄道局員がこの参謀本部の落ち度を何とか取り戻そうと努力する試みを描いており、これらは興味深く、また分かりやすく書かれている。「増強された第2軍をバルカン戦線に送ったことは、大戦中の初期段階にオーストリア＝ハンガリーが下したもっとも悲劇的な決断の一つである<sup>26</sup>」とのタンストールの評価は全く正しいもので、やはり最終的にはその壊滅についての責めを負うべき者はコンラートだろう<sup>27</sup>。しかしながら、コンラートの失敗は「認識の相違・不一致<sup>28</sup>」の問題として理解するより、むしろオーストリア＝ハンガリー固有の政策優先順位の帰結というべきだろう。すなわち、フェルナーも強調するように、（※1914年7月に）ホヨシュがドイツの支援を確保しなければならなかったのは、あくまでも対セルビア戦争のためなのであって、それは決して対ロシア戦争のためではなかったのである<sup>29</sup>。だがコンラート、ベルヒトルト、そして皇帝フランツ・ヨーゼフはオーストリアの対セルビア戦争が勃発した場合にロシアが介入してくることにについては些かも疑いを持っていなかった。

オーストリア＝ハンガリーにどれだけ行動の自由があるかはドイツの支援にかかっていた。それゆえドイツの「白紙小切手（blank check）（※どのような場合でもドイツがオーストリアを支援するという約束）」はオーストリアに形勢逆転する機会を与えたことになるのである。7月の終盤、ドイツのカイザーと宰相（※ベートマン＝ホルヴェーク）が今さら、なんとも躊躇いがちに、そして誠意のない形で大国間戦争を防ごうと努力した（あるいは少なくとも防ごうという素振りを見せた）時、ベルヒトルトとコンラートはオーストリアの新バルカン政策（※対セルビア攻撃計画）が制約される可能性に直面しなければならなかった。というのもガリツィア国境におけるロシアの部分動員（partial mobilization）と部隊展開は、北東地域での極めて多大な損失を伴う（※軍事的な）膠着状態を引き起こすため、オーストリア＝ハンガリー軍に対セルビア作戦を放棄させることになりかねなかったからである。ところがロシアの総動員（general mobilization）計画が動き始めると、（※今度は）ドイツの安全保障はオーストリア＝ハンガリーの支援に依存するようになった<sup>xi</sup>。あたかもロシアの脅威など存在しないかのようにセルビアに向けて動員をかけることでコンラートは対セルビア作戦を実施するために時間を稼ぎ、さらにロシアをけしかけるようドイツに強いたのである。1912～13年（※バルカン戦争やアルバニア危機）でのドイツの行動パターンというものを念頭において、（※土壇場で）ドイツ政府が白紙小切手を回収してしまうかもしれないとの兆候が見えたときに、コンラートがその「小切手」を「現金化」する（※オーストリアがセルビアに攻撃を仕掛け、実際にドイツの支援を要求する

<sup>26</sup> *Ibid.*, p. 220.

<sup>27</sup> Norman Stone, “Die Mobilmachung der österreichisch-ungarischen Armee 1914,” *Militärgeschichtliche Mitteilungen*, No. 16 (1974), pp. 67–95.

<sup>28</sup> Tunstall, *Planning for War*, p. 222.

<sup>29</sup> Fellner, “Austria-Hungary,” pp. 16–18.

こと)のには相応の根拠があったのである。つまり「結局、コンラートにとってドイツとはロシア同様、近東におけるオーストリア＝ハンガリーの立場への脅威そのものだったのである<sup>30</sup>。」これゆえロシアとドイツが実際に戦争に突入して初めて、コンラートは部隊をバルカンから北方へ移動させねばならなくなったのである。ここでオーストリア軍はあまりにも早く南部国境から移動してしまったため対セルビア攻撃に何ら意味をなさなかったばかりか、北部戦域に到達したのはあまりにも遅く、ロシアの勝利を阻むことも出来なかったのである。独逸同盟の軍事的な手段による外交は1914年における勝算と損失の可能性についての杜撰な計算に拍車をかけ、(※独逸両国の)大きくかけ離れた政治的優先順位、相互不信、そして噛み合わない戦略上の協力関係がセルビアとガリツィアでのオーストリア＝ハンガリーの軍事的敗北への道を開いたのであった。

タンストールの本で最も興味深い部分は「動員の歴史叙述 (historiography of mobilization)」と「ハプスブルク軍司令部の陰謀 (Habsburg command conspiracy)」と題された2つの章である。これらの章は、相当程度歪んだ戦争イメージを残すことにより国民や後世の人々を欺こうとしたオーストリア＝ハンガリー軍将校たちの試みを明らかにしている<sup>31</sup>。戦間期に出版された著作物、例えばコンラートの回顧録『我が軍歴より (Aus meiner Dienstzeit)』やカーネギー財団が出版した戦時経済史・社会史シリーズ、そしてかつての軍高官と官僚によるオーストリアの三正面戦争についての正史数冊といったものは、軍司令部を免責することを比較的に容易にし、少なくともハプスブルク帝国の栄光のかけらを回想的に温存することを可能とさせた。オーストリアの第一次世界大戦についての歴史叙述についての簡潔かつ有益な論文の中で、ルドルフ・イエジャーベク (Rudolf Jeřábek) は戦間期オーストリアにおいて「歴史を作った人々と歴史を描いた人々が驚くほどまでに一致していた<sup>32</sup>」ことを指摘する。オーストリア＝ハンガリー軍事史は1960年代末まで弁解的な傾向に支配されていたのである。

(ここでは最近英語で出版された2冊にだけ言及するが)例えばイシュトヴァン・デアークのハプスブルク軍将校団の社会史についての研究者<sup>33</sup>とローレンス・ソンドハウス (Lawrence Sondhaus) によるオーストリア＝ハンガリー海軍についての著作<sup>34</sup>はこの(※弁解がましい研究ばかりという)不愉快な状況を変えた。そしてイエジャーベクによるオスカー・ポティオレク (Oskar Potiorek) の伝記は、まさに有益かつ現代的な軍人伝の典型

<sup>30</sup> Bridge, *Habsburg Monarchy*, p. 343.

<sup>31</sup> Tunstall, *Planning for War*, pp. 189–209.

<sup>32</sup> Rudolf Jeřábek, “Die österreichische Weltkriegsforschung,” Wolfgang Michalka (ed.), *Der Erste Weltkrieg: Wirkung, Wahrnehmung, Analyse* (Munich: Piper, 1994), p. 959: “... eine verblüffende Einheit von Männern, die Geschichte machten, und Männern, die Geschichte schreiben. ...”

<sup>33</sup> István Deák, *Beyond Nationalism: A Social and Political History of the Habsburg Officer Corps, 1848–1918* (New York: Oxford University Press, 1990).

<sup>34</sup> Lawrence Sondhaus, *The Naval Policy of Austria-Hungary, 1867–1918: Navalism, Industrial Development, and the Politics of Dualism* (West Lafayette: Purdue University Press, 1994).

例といえるものだ<sup>35</sup>。ポティオレクは1911年から1914年までボスニア＝ヘルツェゴヴィナ総督を務めた人物である。細部に細心の注意を払いながら、イエジャーベクはコンラートの最大のライヴァル（※であったポティオレク）の経歴と、ハプスブルク帝国の軍人が獲得しうる最高位の一つへの昇進、そして（※皇位継承者）フランツ・フェルディナント大公暗殺に続く（※ポティオレクの）没落を描いた。ちょうど彼が落ち目に差しかかっていた頃、ポティオレクは1914年夏と秋の対セルビア攻撃を指揮していたが、どちらも失敗に終わった。ポティオレクの経歴を丹念に追いながら、読者はハプスブルク帝国陸軍において交友関係や政治的謀略がどれほど意味を持ったか理解できるのである。ボスニア＝ヘルツェゴヴィナを改革し安定化させるという極めて困難な課題に取り組んだポティオレクの試みは失敗に終わったが、このことはハプスブルク帝国の臣下たちが直面せねばならなかった問題を浮き彫りにし、彼らの報告者や手紙のやり取りがウィーンの政策決定過程にどれだけ影響を与えたのかという疑問を提起することになる。最後にセルビアに対する懲罰的な軍事作戦計画の指揮官としてのポティオレク的能力、そして膨大な犠牲者を無視し向うみずな攻撃を先へ先へと進める姿は、第一次世界大戦での（※オーストリア＝ハンガリーの）典型的な戦争の姿を予見させるものであった。

第一次世界大戦におけるオーストリア＝ハンガリーの役割についての信頼に足る包括的な研究は1993年にマンフレート・ラウヘンシュタイナー（Manfred Rauchensteiner）が『双頭の鷲の死（*Der Tod des Doppeladlers*）』<sup>36</sup>を出版するまで存在しなかった。ラウヘンシュタイナーは現在ウィーンの軍事史博物館の館長を務めており（※在任期間1992年から2005年まで、現在はドレスデンのドイツ国防軍軍事史博物館顧問）、オーストリア現代史と軍事史について数多くの本や論文をきわめて精力的に発表している。これは明らかに学生や研究者のみならず、一般の読者向けに書かれている。この本は（※内容を）「史料をまとめて編集し、概略的に結論を導き出すために<sup>37</sup>」利用可能な歴史的知識を明瞭かつ有意義な形でまとめ上げ、整理しようと試みている。（※本書に収められている）地図は有用で、写真は印象的である。そして時折的確な一次史料を交えつつ単刀直入に叙述される文体は（※本書を）読んで楽しいものにさせている。しかしラウヘンシュタイナーは大量の未公開の文書館史料を活用し、その結論により歴史学上の論争を豊かなものにさせ、さらに新しい解釈まで提示しているのである。つまり本書は一般読者とオーストリア＝ハンガリー史に真剣に取り組む学生双方にとって、真摯（※な研究）で、多くの点でまさに傑作であり、分かりやすく叙述された一冊を通して興味深い内容の本なのである。

この本の冒頭では、ラウヘンシュタイナーがいうところの（※オーストリア＝ハンガリーにおける）好戦性の増強（the growing militancy）が描かれている。これをプロイセンの軍

<sup>35</sup> Rudolf Jeřábek, *Potiorek: General im Schatten von Sarajevo* (Graz: Styria Verlag, 1991).

<sup>36</sup> Manfred Rauchensteiner, *Der Tod des Doppeladlers: Österreich-Ungarn und der Erste Weltkrieg* (Graz: Styria Verlag, 1993).

<sup>37</sup> *Ibid.*, p. 674.



国主義と混同してはならないのだが、好戦的な雰囲気は日に日に濃くなっていき、第一次大戦前の数年間、ハプスブルク帝国の社会生活や政治生活を覆っていたのである。次に描かれるのが軍事機構、戦争計画、そして当時の独逸同盟の状態についてである。続いて「七月危機」について紙幅が割かれているが、ここでラウヘンシュタイナーが提示する解釈は斬新である。一次史料を詳細に検討することで、いわゆる「(※1914年7月26日にオーストリア＝ハンガリーとセルビアの国境地帯) テメシュ・クビンで発生した戦闘 (Gefecht bei Temes Kubin)<sup>xii</sup>」についての報告書は、ベルヒルト外相により捏造されたばかりか、なるべく早く皇帝に対セルビア宣戦布告文書に署名させるために意図的に利用されたと指摘するのである。ベルヒルトが対セルビア宣戦布告を急いだ理由は、他の大国の介入を避けるためであった。新しい史料に基づき、ラウヘンシュタイナーは「戦争は発生した (broke out)」というより、むしろ「戦争は引き起こされた (war was unleashed)」という方がより正確な言い方になると主張する。

続いて著者は(※オーストリア＝ハンガリーの)動員、1914年の対セルビア攻撃の失敗とガリツィアでの破滅的な戦闘、そしてこの結果としての1914年不満の冬(※冬の物不足)から筆を進め、1918年の苦い結末に至るまでの第一次世界大戦の政治史・軍事史を大まかに時系列に沿って説明していく。だがこの研究の傑出した点は、大戦における政治と軍事以外の側面も描いているところである。例えば1914～1918年のハプスブルク帝国の社会的・経済的發展、そして陸軍による(※ハプスブルク帝国の)後背地での政治的支配権獲得のための努力、そして帝国の崩壊に至るまでのあらゆるものが国内政治にどのような影響を与えたかが描かれている。また戦争体験、傷病と死、兵士の日常生活、そして一般市民の日常生活までもが考察されている。また著者はオーストリア＝ハンガリーによる戦争中の卑劣な行為 (nasty oddities) を真正面から扱っている。例えばガリツィアとセルビアにおける戒厳令体制の残酷さや、疑惑をかけられた民族グループ、政治運動家に対する措置などについてである。本書の全体像は視野が広く個性豊かなものだが、もっとも興味深い部分はラウヘンシュタイナーが文書館史料により裏付けている部分である。

(※ハプスブルク帝国の)高級陸軍参謀たちの日記、文書、書簡を生き活きと用いることで、コンラート率いる(※オーストリア＝ハンガリー陸軍参謀)本部についての章は、ハプスブルク軍事エリートたち中に確立されていた陰謀体質 (highly developed culture of intrigue) と独逸間の絶え間ない不和というものを読者に生々しく印象付ける。参謀本部将校のルドルフ・クントマン (Rudolf Kundmann) とカール・シュネラー (Karl Schneller) の日記、フリードリヒ大公の副官ヘルベルト・ヘルバーシュタイン (Herbert Herberstein) の回想録、コンラートがフランツ・ヨーゼフ皇帝の軍事官房長のアルトゥール・ボル fras (Artur Bolfras) と交わした書簡といったものは、ラウヘンシュタイナーが引用した中でもっとも魅力的な未公刊史料である。少なくともハプスブルク帝国の幾ばくかの行動の自由を確保し、ドイツによるオーストリアの戦略、指揮系統、そして外交政策の侵害を食い止めるために、コンラート、軍司令部その他が奮闘したこと (これはガリー・W. シャ



ナフェルト (Gary W. Shanafelt) によりある程度は分析済みであったが<sup>38)</sup>は繰り返し現れる主題とはいえないにしても、本書の主題の一つであることは間違いない。これは陸軍司令部と多数の司令官たちのいつもながらのお粗末な戦果と密接にかかわっており、まさにそれゆえにオーストリア＝ハンガリーはドイツの支援に益々依存を深めていくことになるのである<sup>39)</sup>。

一方でオーストリア＝ハンガリー陸軍部隊 (※自体) は善戦したのであり、ラウヘンシュタイナーも全力でこのことを強調している。軍の規律を損なわせたのはあてにならないチェコ人や他のスラヴ系部隊との間に起きた偶発的な問題ではなかった。むしろ (※兵士の) 極度の疲労、ロシア革命やアメリカの戦争の影響、そして和平交渉の失敗こそが軍の規律を損なせたのである。その和平交渉は兵士や市民たちの皇帝に対する信頼を傷つけることになった。軍事作戦 (※の実態) そして戦争目的や和平条件についての議論は (※オーストリア＝ハンガリーの) ドイツ依存の高まりを見せつけることになった。そしてブリッジがいうように、最終的には「仮にドイツが勝利したとしても、オーストリアが独立した大国としてその戦争目的を果たすのは困難だったと思われる<sup>40)</sup>。」ラウヘンシュタイナーは不運な「ジクストゥス事件<sup>xiii)</sup>」以降、三国協商側がいかにオーストリア＝ハンガリーを維持することに興味を失っていったかを描いている。切迫する軍事的・政治的な壊滅と三国協商による国土分割方針に直面しながら、(※1914年の) 開戦時に誤ったのと同じように、陸軍司令部はこの戦いの劇の終幕のヴィラ・ジュスティ休戦 (the Villa Guisti armistice: 1918年11月)<sup>xiv)</sup> においてもまた間違いを犯してしまったのであった。

全体として、この研究の射程の広さに敵う研究はないのである。確かにいくつかの点では、もう少し細部を詰めて論じることでもできよう。例えば (※本書では) オーストリアの国内政治の展開のほうがハンガリーの国内政治よりずっと細かく描かれている<sup>41)</sup>。相当程度、軍事及び政策決定者といった社会の上層に力点が置かれているのは、数年前まで支配的だった歴史叙述の動向の反映である。

オーストリア＝ハンガリーの経済、社会、文化、メンタリティへの戦争の影響についても綿密に調査される必要があるが、これは地域ごとに検証されることによってのみ成し遂

<sup>38)</sup> Gary W. Shanafelt, *The Secret Enemy: Austria-Hungary and the German Alliance, 1914-1918* (New York: Columbia University Press, 1985).

<sup>39)</sup> Rudolf Jeřábek, “Die Brussilowoffensive: Ein Wendepunkt der Koalitionskriegführung der Mittermächte” (Ph.D. Dissertation, Vienna University, 1982) も参照せよ。

<sup>40)</sup> Bridge, *Habsburg Monarchy*, p. 369.

<sup>41)</sup> (※大戦期のハンガリー政治については) József Galántai, *Hungary in the First World War* (Budapest: Akadémiai Kiadó, 1989) を参照せよ。

<sup>42)</sup> Klaus Eisterer and Rolf Steininger (eds.), *Tirol und der Erste Weltkrieg* (Innsbruck: Österreichischer Studien Verlag, 1995).

<sup>43)</sup> Adam Wandruszka and Peter Urbanitsch (eds.), *Die Habsburg Monarchie Vol. I-VI/2* (Vienna: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 1973-1993).

げられるだろう。現在欠けている研究分野としては、ティロル州立文書館とインスブルック大学現代史研究所により現在進められているティロル地方研究のようなものが挙げられる。新たに出版された研究論集は元々インスブルック大学での一連の講義を基にしており、まだ手つかずの研究分野の範囲について教えてくれる<sup>42</sup>。戦争はティロル地方の住民の生活を大きく変えたばかりでなく、ティロル住民が共有する記憶の強力かつ神秘的な常套表現を生み出すことになった。例えばティロルの狙撃隊（Standeschützen）や猟兵連隊（Kaiserjäger）といったものがその例である。この種の研究は更に進められていく必要がある。当面、そして（※オーストリア学術アカデミー出版から出ている）『ハプスブルク帝国<sup>43</sup>』シリーズに第一次世界大戦をテーマとした巻—これはあと2、3年で出版されることになるだろうが<sup>xv</sup>—が出版されない間は、ラウヘンシュタイナーの本こそが、双頭の鷲（※オーストリア＝ハンガリー）の最後の羽ばたきに関心のある者すべてにとって出発点となるはずである。

## 訳 注

- i 京都大学文学部人文科学研究所ウェブサイト (<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~ww1/>)（アクセス日：9月9日）
- ii ハンブルク大学教授のフリッツ・フィッシャーはその著書『世界強国への道（*Griff nach der Weltmacht: Die Kriegzielpolitik des kaiserlichen Deutschland 1914-1918*）』（1961年）において、第一次世界大戦はドイツが「世界強国」となるため自ら引き起こしたものであり、大戦に至るドイツの外交政策や軍事政策が国内の重工業界や金融業界の圧力に大きく影響されていたことを示し、ドイツ歴史学界を超えた一大センセーションを起こした。伝統的な歴史叙述においては、特に「実証史学の祖」レオポルト・フォン・ランケ以降、外交政策や軍事政策は他国との関係（パワーバランス）から論じられることが多かったが（外政優位の原則）、フィッシャーは1969年の著書『幻想の戦争（*Krieg der Illusionen*）』において外交政策は対外関係よりもむしろ国内事情により決定される論じ（内政優位の原則）、これ以降伝統的な外交史・軍事史研究は下火となった。これに代りヴェーラー（Hans Ulrich Wehrer）らによる「社会史」が抬頭することになる。
- iii 代表例としては飯田洋介『ビスマルクと大英帝国：伝統的外交手法の可能性と限界』（勁草書房、2010年）がある。本書は文学部史学科出身の著者が、敢えて伝統的な外交史研究のメソッドを用いることで、ビスマルクの対英外交観を明らかにした傑出した業績である。なお訳者による書評も参照のこと。島田昌幸「＜書評＞飯田洋介著『ビスマルクと大英帝国—伝統的外交手法の可能性と限界—』『現代史研究』57号（2011年12月）、141-147頁。
- iv 第一次世界大戦前のオーストリア＝ハンガリー外交史の研究史を整理した日本語の著作としては馬場優『オーストリア＝ハンガリーとバルカン戦争：第一次世界大戦への道』（法政大学出版会、2006年）の第1章がある。また独逸同盟については馬場優「独逸同盟締結」『法学雑誌（大阪市立大学）』第44巻第4号（1998年）、565-596頁が有用である。
- v Günther Kronenbitter (ed.), *Friedrich Gentz: Gesammelte Schriften. 12 Bände in 24 Teilbänden* (Hildesheim-Zürich-New York, 1997-2004).
- vi クローネンビットターの経歴についてはハプスブルク軍事史研究の権威であるG. ローゼンバークによる『「平時の戦争」』の書評を参照のこと。Guenther Rosenberg, "To Save the Dual Monarchy: The Austro-Hungarian General Staff 1906-1914," (<http://h-net.msu.edu/cgi-bin/logbrowse.pl?trx=vx&list=habsburg&month=0402&week=c&msg=zdVmXKt3O>)

j3uKRDMPhdHQ&user=&pw=) (アクセス日：2013 年 9 月 8 日)

- vii 実際には「バルカン戦争」は「第一次」(1912 年 10 月～1913 年 5 月)と「第二次」(1913 年 6 月～8 月)だけしかない。だがオーストリアは欧州大戦を欲していた訳ではなく、あくまで「第三次」バルカン戦争としての対セルビア戦争だったのだということを強調する場合、この「第三次」という表現が使われる。おそらく「第三次バルカン戦争」という表現は 1971 年に発表されたヨアヒム・レマクの論文に端を発すると考えられる。Joachim Remak, “The Third Balkan War: Origins Reconsidered,” *Journal of Modern History*, Vol.43, No.3 (1971), pp.353–366.
- viii 「七月危機」とは 1914 年 6 月 28 日のオーストリア＝ハンガリーの皇位継承者フランツ・フェルディナント大公の暗殺から 7 月 28 日のオーストリアによるセルビアへの宣戦と「大戦」に発展するまでの約 1 か月間の欧州大国間による戦争回避・開戦の双方の意図が交錯した外交戦のことを指す。
- ix 「ホヨシュ使節団 (Mission Hoyos)」とは 1914 年 7 月初旬にオーストリアからドイツに派遣された外交使節であり、ドイツ側から「白紙小切手 (Carte blanche/Blankoscheck)」, 即ちオーストリアに対するドイツの無条件の支持, 具体的にはオーストリアの対セルビア戦争の際のドイツの支持を獲得するために派遣された。アレクザンダー・ホヨシュ伯爵 (Alexander Graf von Hoyos) はベルヒトルト外相の大臣官房長 (chef de cabinet) であり, 外交アドヴァイザー役であった。ちなみにホヨシュは魚雷ビジネスで巨万の富を築いた「死の商人」ロバート・ホワイトヘッド (Robert Whitehead) の孫にあたる。
- x シュリーフェン・プランとは 19 世紀末に当時のドイツ帝国陸軍参謀総長アルフレート・フォン・シュリーフェン (Alfred von Schlieffen) が提唱した軍事作戦計画で, 独露再保障条約の不更新 (1890 年) 後, ドイツの軍事戦略の土台となった。1894 年に露仏同盟が締結されると, ドイツはフランスとロシアの二正面作戦を想定することを余儀なくされた。そこでシュリーフェンは先ずフランスに猛攻をかけてこれを破り, その後東に反転してロシアを叩くという作戦計画を立案した。これがシュリーフェン・プランであり, 少しずつ修正されながらも, 第一次世界大戦時に実行に移されることになる。
- xi 当初ロシア皇帝ニコライ 2 世は, オーストリアの対セルビア宣戦の報に接したとき, オーストリアを対象とした「部分動員」令を発令しようとした。だがこれは戦争遂行上不利だと結論に至り, 7 月 31 日ニコライ 2 世は「総動員」令を発令した。このロシアの「総動員」を受けて, ドイツも 8 月 1 日に「総動員」令を出し, かくてシュリーフェン・プランが発動されることになった。仮にロシアの対オーストリア「部分動員」だけが発令されると, オーストリアは当面ロシアとの戦争で手一杯になり, 対セルビア戦争どころではなくなる。だがロシアが「総動員」をかけ, オーストリアだけでなくドイツと対決するようになれば, ドイツはオーストリアの支援を必要として独逸の立場がある意味逆転する。かくして, オーストリアはセルビア攻撃に力を割けるようになるわけである。
- xii オーストリアがセルビアに最後通牒を送ったのが 1914 年 7 月 23 日, セルビアの返答を不服として国交を断絶したのが 7 月 25 日, そしてセルビアに宣戦布告したのが 7 月 28 日のことである。ここで取り上げられた 7 月 26 日の「テメシュ・クビンでの戦闘」事件はベルヒトルト外相の 7 月 27 日付報告書によれば次のようなものである。「第 4 軍司令部の報告によれば, 昨日セルビア軍部隊はドナウ川を航行する蒸気船から我が部隊に向けて発砲。我が方もこれに応戦したため偶発的ながら相当程度の衝突に至った (Luigi Albertini, *The Origins of the War of 1914 Vol. 2 (New and updated edition)* (New York: Enigma Books, 2005, Originally published by Oxford University Press in 1952 ), p. 460).」だが実際にはドナウ川を移送中の予備役のセルビア兵が誤ってオーストリア＝ハンガリー国境を越えただけで, 戦闘は起こらなかった。つまりベルヒトルトはセルビア軍のミスを意図的に「戦闘」とみなして対セルビア宣戦布告を早めるための材料として利用したのである。
- xiii 1917 年 3 月, 皇帝カール 1 世は皇后ツィタの兄ジクストゥス (ブルボン・パルマ家: フランス軍に従軍) を秘密裏にオーストリアに呼び寄せ, 英仏を対象とした和平交渉の橋渡し役を依頼した。この交渉は同年 6 月に決裂したが, これはイタリアの反対によるものである。カールはアルザス・ロレーヌ地方の返還やベルギーの戦後について言及していたが, イタリア領土については何も提示していなかったため, イタリアの反感を買ったのであった。更に当時のオーストリア外相チェルニと仏首相クレマンソーの間の確執の結果として, 1918 年 4 月クレマンソーはオーストリアがドイツを差

し置いて和平交渉を持ちかけていたことを暴露した。これを「ジクストゥス事件」という。本件はドイツの対オーストリア不信を増幅させ、結果的にオーストリアが益々対独従属的な立場に貶められる原因となった。ジクストゥスによる和平交渉については Tamara Griesser-Pečar, *Die Mission Sixtus: Österreichs Friedensversuch im ersten Weltkrieg* (Vienna: Amalthea, 1988) を参照のこと。

- xiv これは 1918 年 11 月にオーストリア＝ハンガリーとイタリアの間で結ばれた休戦協定（イタリア戦線）である。これによりイタリア戦線が終結することになった。ただ休戦協定調印が 11 月 3 日、その発効が 11 月 4 日となっていたにもかかわらず、オーストリア軍は 11 月 3 日の時点で攻撃をやめたため、イタリア軍の更なる進撃を許してしまうというミスを犯してしまった。
- xv 現在もオーストリア学術アカデミー出版の『ハプスブルク帝国』の第一次世界大戦の巻は出版されていない。Cf. <http://verlag.oeaw.ac.at/categorie?page=categorie&cat=55&sorting=date>（アクセス日：2013 年 9 月 13 日）